

“Is there any + [plural NP]” は非文法的か？
—疑問文に侵食しつつある “there’s + [plural NP]”—

Is “Is there any + [plural NP]” Ungrammatical?

西 谷 工 平

ローレンス・ダンテ

“Is there any + [plural NP]” は非文法的か？

－ 疑問文に侵食しつつある “there’s + [plural NP]” －

Is “Is there any + [plural NP]” Ungrammatical?

西谷 工平 (実践英語学科)

NISHITANI Kohei

ローレンス・ダンテ (実践英語学科)

Laurence DANTE

Abstract This paper investigates the current acceptability of “Is there any + [plural NP]” (hereinafter referred to as ITAP), based on data from English corpora. ITAP is unacceptable in Standard English because of the grammatical disagreement between its “be” verb and subsequent subject noun phrase, for example, “Is there any questions?”. However, recent studies point out that “there’s + [plural NP]” has been gaining acceptance among a variety of people. Meanwhile, other studies regard “there’s” as a “chunk” and clarify its register, uniqueness, grammatical characteristics, etc. Given the current status of “there’s” as a chunk, an investigation of the acceptability of its interrogative version, namely “Is there any + [plural NP]” may prove to be of some academic worth. Through an analysis based on English corpora, this paper argues that ITAP is also becoming a chunk mainly used in informal contexts, regardless of its ungrammaticality.

キーワード：there’s、文法的不一致、コーパス、フレイジオロジー

1. はじめに

本論の目的は、英語として非文法的であるはずの “Is there any + [plural NP]” (以下、ITAP) について、英語母語話者の間で容認可能なものとしてすでに定着しつつある “there’s + [plural NP]” (Hilton, 2018) との関連性を視野に入れつつ、その使用域と容認可能性をコーパスに基づいて分析することにある。

COCA (Corpus of Contemporary American English)¹で検索すると、以下の(1)のように、ITAPが英語母語話者の発話の中に観察されることがある。

- (1) Listen, is there any questions I can answer for you? (COCA)

通例、存在を表す *there* 構文において、*be* 動詞は後続の主語名詞句に呼応して形態変化する。そのため、(1) の場合、*be* 動詞は主語名詞句の複数性に合わせて、*is* ではなく *are* にしなくてはならない²。

これはただの偶然の誤りなのか。詳細は後述するが、COCA で類例を探ってみると、どうやら ITAP は、とくに話しことばに分布が偏っているようである。試しに、話しことばが多く使用されていると考えられる The TV Corpus³ や The Movie Corpus⁴ をあたってみると、以下の (2) のように、類例が容易に見つかる。

- (2) a. Oh, is there any rules I should know about before we start? (The TV Corpus)
b. Is there any questions? - Yes, sir. I have one question. (The Movie Corpus)

標準的な英語の文法規則からすれば、(2a) と (2b) の *is* は、それぞれの主語名詞句に相当する *rules*、*questions* に呼応して *are* でなくてはならない。

以上のように、英語母語話者の間で“*there's* + [plural NP]”が容認可能なものとして定着しつつある一方で、(1) や (2) もまた英語母語話者による発話であり、しかも類例が容易に見つかるという現状を考慮に入れると、ITAP をただの偶然の誤りとして片付けるのは早計だと考えられる。

そこで本論では、英語母語話者による ITAP の使用実態をコーパスで観察・分析することで、その使用域を概略的に捉えると同時に、ITAP もまた“*there's* + [plural NP]”と同様にひとまとまりで特定の意味を有する、分解できないチャンクを構成している可能性を模索する (cf. Crawford, 2005; Breivik & Martinez-Insua, 2008)。

2. 先行研究

ここで、“*there's* + [plural NP]”に内在する文法的不一致について、本論と関係すると考えられる主要な研究をいくつか取り上げて概観しておきたい。ここで押さえておきたいポイントは、“*there's* + [plural NP]”の使用域、特異性、文法的位置付け、文法的不一致の要因の4つである。

これまでの研究が“*there's* + [plural NP]”に関して指摘してきた第一のポイントは、このような文法的不一致が容認される使用域である。Martinez-Insua and Palacios Martinez (2003) は BNC (British National Corpus) を利用したデータ分析から、文法的不一致を含む *there* 構文が書きことばよりも話しことばに多く見受けられること、とくに話しことばで“*there's*”が使用された場合に、圧倒的に多くの文法的不一致が含まれることを明らかにしている。同様の分布が Crawford (2005) の調査でも明らかになっている。Crawford は複数のコーパスから5つの使用域 (conversation, lectures, textbooks, fiction, chat) で使用されている *there* 構文を分析し、“*there's* + [plural NP]”のような文法的不一致が概して

話しことば (conversation と lectures) に集中していること、話しことばがインフォーマル (conversation) でもフォーマル (lectures) でも、文法的不一致がほぼ同程度に確認されることを指摘する⁵。

第二のポイントは、縮約形である “there’s” と、その元となる “there is” が実は別物であり、そのことが近年の社会言語学的分析 (e.g. Hilton, 2016; Krejci & Hilton, 2017; Hilton, 2018) から裏付けられていることである。確かに、問題の文法的不一致が “there is” ではなく “there’s” に集中していることも両者が互いに異質であることを示唆しているが (cf. Crawford, 2005)、さらに Hilton (2018) は “there’s + [plural NP]” が現在では社会的に容認され、無標とみなされていることを指摘する。Hilton が行った “there’s + [plural NP]” の社会的知覚に関する実験によると、“there’s + [plural NP]” を使用する話し手はまだ雄弁であり、教養があり、裕福であると認識されるが、“there is + [plural NP]” を使用する話し手はそうではないという烙印を押されるという。つまり、there 構文というカテゴリの中で、“there’s” は単に “there is” を縮約したものではなく、独自に特異な地位を占めているということである。

第三のポイントは、“there’s” の文法的位置付けである。Crawford (2005) は、どの使用域の “there’s” にも文法的不一致の事例が見受けられることから、“there’s” を主語・動詞といった方法で分解することができない定型表現とみなしている。Brevik and Martinez-Insua (2008) は “there” が文法化 (場所を表す副詞としての機能の喪失) と主観化 (新情報提示予告機能の獲得) を経て現在の用法に至ったことを踏まえ、“there’s” もひとまとまりでそうした語用論的機能を果たすと主張する。Hilton (2018) は “there’s + [plural NP]” が、文法規範に違反しつつも、規範文法を重視する人々にすら容認されていることから、文法的に単数とみなされていない (つまり、文法的不一致ではない) かもしれないと推測する。これらの研究から、“there’s” をチャンクとみなして、その文法的位置付けを考える必要があるようである⁶。

第四のポイントは、問題の文法的不一致が生じる要因である。本論との関係でとくに押さえておきたい要因は、“there’s” に続く語句の構造と、話しことばの特性である。Martinez-Insua and Palacios Martinez (2003) は、“there’s” に続く語句の長さや複雑さが文法的不一致に関係することを明らかにしている。具体的には、“there’s” の主語名詞句に副詞句、後置修飾の関係節や to 不定詞が続いたり、複数の主語名詞句が接続詞で結ばれていたり、“there’s” と主語名詞句の間に副詞句が介在したりすると、文法的不一致が生じやすいようである。また、Martinez-Insua and Palacios Martinez は、話しことばの特性を “there’s” の文法的不一致の要因として指摘する。話しことばは常に進行する会話で使用される即時的なものであるため、書きことばのように前後を行き来するような形で文法的不一致を捜し出すことができないという。Crawford (2005) は、そうした特性を持つ話しことばが話し手に生じさせる認知的負荷が “there’s” の文法的不一致に関与する可能性を指

摘する。

以上を俯瞰すると、“there’s + [plural NP]”は、主に話しことばに見受けられ、元となる“there is”とは別物の、分解不可能なチャンクであり、“there’s”の主語名詞句の構造と話しことばの特性が当該の文法的不一致の要因だということになる。

このような“there’s + [plural NP]”がチャンクとして英語母語話者に定着しつつあるとするならば、その疑問文はどうなのか。本論の論点はここにある。複数のコーパスでthere構文の疑問文を観察すると、とくにITAP (“Is there any + [plural NP]”)についてはまとまった数が見受けられる。仮に、ITAPが“there’s + [plural NP]”と同様のふるまいを見せるのであれば、“there’s + [plural NP]”と同じようにチャンクを構成している可能性も考えられる。そこで本論では、この可能性を探るべく、分析を展開する。

3. 分析

3.1. 分析対象と分析方法

具体的な分析に入る前に、本論の分析対象と分析方法について簡単に説明しておきたい。まず、本論の分析対象は“Is there any + [plural NP]”というパターンに当てはまる、以下のような事例である。

(3) Listen, is there any questions I can answer for you? (= (1)) (COCA)

ここで“Is there + [plural NP]”ではなく“Is there any + [plural NP]”というパターンに限定している理由は、そもそも“Is there any”自体が相対的に高い頻度で使用されているためである。たとえば、COCAで“Is there”の直後に入る語をワイルドカード検索すると(“is there *”)、ワイルドカード(*)の位置に最も高い頻度で生じるのが冠詞のa、その次が形容詞のanyなのである⁷。これは、“Is there any”がチャンクを構成している可能性を示唆する。

分析対象をITAPに限定するもうひとつの理由は、“Is there + [plural NP]”にかなりの数の亜種が存在し、本論でそのすべてを取り扱うのは困難だと予測されるからである。確かに、“there’s + [plural NP]”が容認されつつあるというのなら、まずは“Is there + [plural NP]”の容認可能性を探るのが筋である。しかし、“Is there”と “[plural NP]”との間には、理論上いくらでも修飾語句を挟み込むことができるため⁸、その事例の総体は、本論で取り扱うにはあまりにも膨大となる。そのため、“Is there + [plural NP]”の容認可能性がわからない段階では、使用頻度の高い修飾語句(e.g. any)で事例に絞り込みをかけてサンプル調査を行う方が、現実的だと考えられる。

次に、本論の分析方法を説明する。本論ではEnglish-Corpora.org⁹が提供する複数のコーパスを援用して、ITAPの使用実態を分析する。ITAPが実際にどの程度まで定着している

のかを確かめるため、ITAPと同じく現在時制であり、文法的に適格である“Are there any + [plural NP]”（以下、ATAP）との比較を行う。つまり、ITAPとATAPで “[Be] there any + [plural NP]” という母集合を構成する。なお、ITAPもATAPも “any” と “[plural NP]” との間に修飾語句が入る可能性があるが、ここではサンプル調査として “any” の直後に “[plural NP]” が位置する事例のみを取り扱う。

なお、コーパスでITAPやATAPを検索すると、極めてまれに以下の(4)のような倒置構文が見受けられることがある。

(4) ... there is nothing malicious about them, nor is there any backlinks. (COCA)

(4) は否定接続詞の nor により is と there が倒置している事例である。しかし、be 動詞と主語名詞句に文法的不一致が生じていることに違いはなく、数も極めて限定的であるため、本論ではこのような事例を除外せず、ITAPとATAPの事例に含めることにする。

以上を前提として、以下、コーパスでITAPとATAPの使用実態をジャンルと年代から観察することで、ITAPの使用域と容認可能性の把握を試みる。

3.2. ITAP と ATAP の使用実態

では、標準的な規則から逸脱している “Is there any + [plural NP]” (ITAP) は、実際のところどのように使用されているのか。以下では、複数のコーパスでITAPのふるまいを見る。

まず、Balanced CorpusのひとつであるCOCAでITAPの使用実態を検索すると、以下のようになった。

表 1. Search: is there any _nn2¹⁰ (ITAP)

Genre

	ALL	TV/MOVIES	SPOKEN	FICTION	MAGAZINE	NEWSPAPER	ACADEMIC
TOTAL	45	23	16	0	2	2	2

Year

	ALL	1990-1994	1995-1999	2000-2004	2005-2009	2010-2014	2015-2019
TOTAL	45	4	8	7	10	5	11

ITAPの使用域はTV/MOVIESとSPOKENが中心であり、それ以外の使用域では、ほぼ見受けられない。また、約30年間で使用数は年代を追うごとに微増の傾向にあるようだが、数値的に使用域ほどの大きな差異は認められない。

この分布はITAPに特有なのか。同じ条件で、今度は文法的に適格な “Are there any + [plural noun]” (ATAP) の使用実態を見てみよう。

表 2. Search: Are there any _nn2 (ATAP)

Genre

	ALL	TV/MOVIES	SPOKEN	FICTION	MAGAZINE	NEWSPAPER	ACADEMIC
TOTAL	988	326	339	86	110	42	85

Year

	ALL	1990-1994	1995-1999	2000-2004	2005-2009	2010-2014	2015-2019
TOTAL	988	175	179	193	168	154	119

まず、使用域については、ITAP と同じく、TV/MOVIES と SPOKEN が中心である。しかし、ITAP と違い、ATAP は他の使用域にも幅広く分布している。なお、ATAP の使用頻度は 2005 年以降、なぜか減少傾向にある。

とくに分布の偏りが見受けられた TV/MOVIES と SPOKEN のうち、前者についてはコーパスが存在する。The TV Corpus と The Movie Corpus である。ただし、これらは Balanced Corpus ではなく、各年代で採取したサンプル総数が異なる（具体的には、新しい年代ほど採取したサンプル総数が多い）ため、年代を追うごとに ITAP や ATAP の使用頻度が高くなっているということではない点に注意されたい。

まず、The TV Corpus における ITAP と ATAP の使用実態は、それぞれ以下の表 3 と表 4 の通りである。

表 3. Search: Is there any _nn2 (ITAP)

Year

	ALL	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s
TOTAL	60	0	1	1	1	3	21	33

表 4. Search: Are there any _nn2 (ATAP)

Year

	ALL	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s
TOTAL	804	4	30	31	36	92	240	371

両者の比較からわかるように、年代を通して、文法的に適格な ATAP の使用頻度が増加するにつれ、ITAP の使用頻度も増加している。このような傾向は、以下の The Movie Corpus の結果からも確認することができる。

表 5. Search: Is there any _nn2 (ITAP)

Year

	ALL	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s
TOTAL	43	0	1	2	3	6	4	3	12	12

表 6. Search: Are there any _nn2 (ATAP)

Year

	ALL	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s
TOTAL	662	12	38	37	47	46	55	80	164	183

以上から、ITAP と ATAP の使用頻度は、およそ正比例の関係にあることがわかる。見方を変えると、文法的に適切な ATAP の使用頻度が高まるほど、そこに非文法的な ITAP が紛れ込む、ということである。

だとすると、表 1 と表 2 で見た各年代の両者の使用頻度の相関性はどうなるのか。中身を振り返ると、ITAP は年代を追うごとに微増傾向、ATAP は 2005 年を皮切りに減少傾向ということであった。これは、正比例の関係とは言えない。

実は、表 1 と表 2 の結果には、各年代の使用頻度が表示されないという事情から、2 つのジャンルが取り除かれている。BLOG と WEB-GENL (BLOG 以外のウェブサイト) である。以下に、COCA の検索結果を表示する。

表 7. Search: is there any _nn2 (ITAP)

Genre

	ALL	BLOG	WEB-GENL
TOTAL	31	18	13

表 8. Search: Are there any _nn2 (ATAP)

Genre

	ALL	BLOG	WEB-GENL
TOTAL	355	180	175

これらはいずれも 2012 年に採取されたサンプルである。“[Be] there any + [plural NP]” という母集合が ITAP と ATAP で構成されると仮定して、そこで ITAP が占める割合は BLOG が 9.1%、WEB-GENL が 6.9% である。2012 年に近似する 2010 年代の使用頻度で言うと、ITAP が占める割合は、The TV Corpus では 8.2%、The Movie Corpus では 6.2% である。また、2017 年にウェブサイトから採取したサンプルで構成される大規模コーパスの iWeb: The 14 Billion Word Web Corpus¹¹ で ITAP と ATAP を検索すると、ITAP の使用頻度が 3,207、ATAP の使用頻度が 33,631 であり、ITAP が占める割合は 8.7% である。

これらの点を総合的に考えると、表 1 と表 2 の、とくに 2010-2014 と 2015-2019 といった年代に示されている ITAP と ATAP の使用頻度は、仮にウェブサイトから採取したサンプルを加味するならば、実際にはもっと大きいのではないかと推測される。また、表 2 で 2005 年以降に ATAP の使用頻度が減少傾向にあるのは、これは推測の域を出ないのだが、何らかのメディアシフト（たとえば、情報の主流がテレビやラジオからインターネットへ移ったことなど）により、表 2 で示されている使用域から採取されたサンプル数が減少し

たことが要因なのかもしれない¹²。

4. 考察

これまでに分析した複数のコーパスにおける ITAP のデータに基づいて、ITAP の性質を考察しよう。

第一に、ITAP は話しことば¹³ で使用される可能性が高い (cf. Martinez-Insua & Palacios Martinez, 2003; Crawford, 2005)。これは、ITAP が非文法的であるという点は別として、ATAP と同様に相手がいることを想定した疑問文の一種であることを考えると¹⁴、もはや自明である。現に COCA では、ITAP は TV/MOVIES と SPOKEN という 2 つのジャンルに分布が偏っていた。

SPOKEN は当然のこととして、TV/MOVIES で使用される ITAP は話しことばだと即断してもよいのか。実際のところ、次の (5) のように、The TV Corpus と The Movie Corpus で ITAP を検索すれば、相手がいることを想定したやり取りを容易に見つけることができる。

- (5) a. Mike Hall: Right, is there any guns in the house? Suspect: No Sir. (The TV Corpus)
b. Is there any questions? - Yes, sir. I have one question. (= (2b)) (The Movie Corpus)

テレビであれ映画であれ、そこには出演者や登場人物が存在し、そうした人々の間 (あるいは、視聴者との間¹⁵) でことばが交わされるのであれば、その中で発現し得る (5) のような事例を話しことばとみなすことに何ら支障はないと考えられる。また、以下の (6) のように、応答のない ITAP も確認されるが、いずれにせよ相手がいることを想定した話しことばであることに変わりはない。

- (6) Is there any objections? All right. Now, listen to me.

第二に、ITAP はインフォーマルな媒体で容認される傾向がある。COCA で設定されているジャンルを大雑把に分類するとすれば、FICTION、MAGAZINE、NEWSPAPER、ACADEMIC は、出版物であるがゆえにフォーマル寄り、BLOG と WEB-GENL は、行政や企業によるものだけではなく個人によるものも含まれるため、どちらかと言えばインフォーマル寄りだと推測される¹⁶。

表1が示すように、ITAP は、FICTION では0、それ以外の MAGAZINE、NEWSPAPER、ACADEMIC においても、極めて限られた数でしか確認できない。以下の (7) がその事例である。

- (7) a. O'REILLY: ... Is there any truths to that? MITCHELL: I think that probably is true.
(MAGAZINE)
- b. Q: Is there any similarities between coach Larry Brown and coach George Karl? A:
No. Not at all. (NEWSPAPER)
- c. Is there any relationships between the change in pH and the proportions of plant
and animal life in the pools? Explain. (ACADEMIC)
- (COCA)

MAGAZINE と NEWSPAPER で見受けられた (7a) と (7b) は会話を文字起こしたものであり、実質的にはインフォーマルである。その一方で、ACADEMIC で見受けられた (7c) は質問事項に類するものであり、どちらかと言えばフォーマルである。いずれにしても、これらのジャンルは非文法的な表現が容認されにくい書きことばが主であること¹⁷、仮にそうした表現が含まれるとしても、それは (7a) や (7b) のように会話を文字起こしたものであること、数値的な観点からすれば ITAP は皆無に等しいことなど考慮に入れると、ITAP は、そもそも非文法的であるがゆえに、フォーマルな媒体にはなじまないのだと判断される。

これに対して、表7が示すように、BLOG と WEB-GENL では、ITAP が相対的に多く見受けられる。以下の (8) がその事例である。

- (8) a. Is there any books in specific that i[sic] can pick up? (BLOG)
- b. i[sic] want to know is there any differences between UK and USA English in pronunciation and grammar? (WEB-GENL)
- (COCA)

どちらも個人によって書かれた文であり、ITAP が見受けられる。これらが書きことばであることは確かだが、行政や企業によるブログやウェブサイトでもない限り、出版物のように校閲があるわけではないため、意思疎通に特段の支障がなければ、多少の非文法的な表現は見過ごされる可能性がある。さらに、ブログやウェブサイトは、個人がいつでも自由に書くことができるため、その分だけ、ITAP がより多く見受けられるのだと推測される。

なお、このようなインフォーマルな媒体で ITAP が定着しつつある点は、iWeb でのサンプル数からも間接的に裏付けられる。確かに、表7と表8の BLOG と WEB-GENL のサンプル数だけを見ると、ITAP は偶発的な誤りだとみなされるかもしれない。しかしながら、iWeb における ITAP のサンプル数の規模と、iWeb における ITAP と ATAP の比率が BLOG と WEB-GENL のそれに近似することを考慮に入れると、むしろ ITAP を偶発的な誤りとして片付けることは難しくなる。

第三に、ITAP は、ひとまとまりで事物の存在を問う意味を持つ、分解不可能なチャンクを構成している可能性がある (cf. Crawford, 2005; Breivik & Martinez-Insua, 2008; Hilton, 2018)。ITAP は、is と主語名詞句の間に文法的呼応が成立していないため、明らかに非文法的である。それにもかかわらず、ITAP が特定のジャンルでまとまって確認されることを踏まえると、先行研究で指摘されてきた “there’s + [plural noun]” と同様に、ITAP もまたひとつの意味を持つチャンクとして、近年になり容認されつつあると推測される。

ITAP で is と主語名詞句の間に距離があることも、ITAP のチャンク化に関与している可能性がある (cf. Martinez-Insua & Palacios Martinez, 2003)。be 動詞を使った一般的な疑問文について改めて考えてみると、たとえば “Are you” や “Is she” といったように、be 動詞と主語名詞句は隣接する。そのため、“*Is you” や “*Are she” のような文法的呼応の齟齬は容易に認識可能だと推測される¹⁸。ところが、ITAP では is と主語名詞句の間に距離があり、しかも “Is there” 自体が、文法的呼応をよそに、違和感のない定着した言い回しであるため、文法的呼応の齟齬を認識させにくくしているのかもしれない¹⁹。

以上の考察をまとめると、ITAP は、現状では少なくともおよそ以下のように定義されると考えられる。

- (9) “Is there any + [plural NP]” は事物の存在を問う意味を持ち、主に話しことばで使用され、とくにインフォーマルな媒体で容認される傾向のある、主語名詞句との呼応を必要としない、分解不可能なチャンクである。

5. 結論と展望

本論では、先行研究で指摘されきた “there’s + [plural NP]” の使用域と容認可能性を踏まえて、その疑問文の一形式である “Is there any + [plural NP]” の使用域と容認可能性を、複数のコーパスを通して分析した。

“Is there any + [plural NP]” の使用域は “there’s + [plural NP]” と概ね一致し、ある程度まとまった使用実態が確認されることから、“Is there any” がチャンクを構成している可能性を指摘した。しかし、“Is there any + [plural NP]” と文法的に適格な “Are there any + [plural NP]” を併せて母集合とした場合、“Is there any + [plural NP]” の使用割合は 10% に満たないため、“there’s + [plural NP]” ほどの容認可能性は、今のところはないと考えられる。

他方、COCA の BLOG と WEB-GENL (2012 年)、および iWeb (2017 年) における “Is there any + [plural NP]” の使用割合はそれぞれ 9.1%、6.9%、8.7% であり、COCA の残りのジャンル (TV/MOVIES, SPOKEN, FICTION, MAGAZINE, NEWSPAPER, ACADEMIC; 1990 ~ 2019 年) での使用割合である 4.4% よりも増加しているため、“Is there any” が時

間の経過とともにチャンクとして捉えられつつある可能性を示唆する。

なお、“Is there any + [plural NP]”ではなく“Is there + [plural NP]”が英語母語話者の中でどの程度まで浸透し、容認可能とされているのかについては、今後の検討課題のひとつである。また、仮に“there’s + [plural NP]”や“Is there any + [plural NP]”が英語母語話者の中で容認可能とされつつあるのであれば、そうした変化が英語を母語としない英語学習者の学習にどのような影響を与え得るのか、それに対応してどのような指導法を考案すべきなのか²⁰、これらも今後の検討課題のひとつになるかもしれない。

注

- 1 COCA: Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>)
- 2 形容詞の any が可算名詞と共起する場合、その可算名詞は通例複数であることから、any もまた複数マーカーとして機能し得る点にも注意が必要である。たとえ any で複数性が示唆されていたとしても、ITAP では be 動詞が is なのである。
- 3 The TV Corpus (<https://www.english-corpora.org/tv/>)
- 4 The Movie Corpus (<https://www.english-corpora.org/movies/>)
- 5 フォーマルであるはずの lectures に“there’s + [plural NP]”が使用される理由として、Crawford (2005) は、lectures で話し手に生じる認知的負荷（長時間、話し続けること）と lectures における“there’s + [plural NP]”の談話機能（話す項目をリスト化する機能と話を締め括る機能）を挙げる。
- 6 他方、“there’s”をチャンクとみなさない可能性として、たとえば Krejci and Hilton (2017) は“there’s”が“there”と“-s”から構成され、“-s”と“is”が別個の語彙項目だという可能性を指摘する。このとき、here や where に“-s”を付加した“here’s”や“where’s”は、文法的一致について“there’s”と似たふるまいをするという。
- 7 COCA における“is there *”のサンプル総数は 61,414、ワイルドカード (*) に入る語の第一位は冠詞の a で、その数は 13,284、第二位は形容詞の any で、その数は 7,649 である。
- 8 “Is there”と “[plural NP]”の間に修飾語句を挟み込んだ分だけ、“Is there”に続く語句の長さや複雑さが増すため、それに比例して“Is”と “[plural NP]”の文法的不一致も増す可能性はある (cf. Martinez-Insua & Palacios Martinez, 2003)。この点は、“Is there”のチャンク化を捉えようとする中で、今後の課題となる。
- 9 English-Corpora.org (<https://www.english-corpora.org/>)
- 10 “_nn2”は English-Corpora.org のコーパスで複数名詞を指定検索するときに使用する記号である。
- 11 iWeb: The 14 Billion Word Web Corpus (<https://www.english-corpora.org/iweb/>)

- 12 Pew Research Center の概況報告書 (<https://www.pewresearch.org/internet/fact-sheet/internet-broadband/>) によると、アメリカ合衆国では2000～2010年の間にブロードバンドサービスを利用する人口が急速に増加している。
- 13 ここでは一般論としての話しことば、書きことばについて論じ、両者の詳細な区分や相関性には立ち入らない。
- 14 ただし、ITAP や ATAP のほとんどが疑問文であるということなのであって、(4) のような倒置構文の存在を忘れてはならない。
- 15 テレビや映画のモノローグは、視聴者を意識したものであるため、話しことばに近いと考えられる。
- 16 日本語の場合ではあるが、野田 (2014) は読み手の存在を意識していると考えられる独話のような表現 (疑似独話) がブログに頻繁に見受けられることを指摘する。疑似独話が書き手と読み手の距離を縮めるものだとするならば、BLOG はやはりインフォーマル寄りと考えても差し支えないと考えられる。
- 17 書きことばに ITAP が含まれているとすれば、意図的である場合を除き、出版前に「誤植」として修正されるはずである。
- 18 COCA で “*Is you + [adjective]” と “Are you + [adjective]”、“*Are she + [adjective]” と “Is she + [adjective]” を検索すると、結果は以下ようになる。be 動詞と主語名詞句が隣接する場合、文法的呼応の齟齬は生じにくいようである。

Is you	Are you	Are she	Is she
133	55,749	1	2,415
1:419		1:2,415	

- 19 この点に関しては、句を基本単位とし、その役割を認めるフレイジオロジーの観点からの説明が妥当かもしれない (cf. 八木, 2013; 住吉, 2016)。
- 20 英語を母語としない英語学習者にとって、この種の容認可能性の変化は学習上の混乱を招く可能性がある。そのため、指導にあたっては、チャンクという概念が、時には文法的適格性の問題を棚上げにする場合があることを教示しなければならない。この点を初級の段階から教示すべきなのか、中・上級の段階から教示すべきなのか、多角的な議論を重ねる必要がある。

参考文献

- Breivik, L. E., and A. E. Martinez-Insua. (2008). Grammaticalization, subjectification and non-concord in English existential sentences. *English Studies*, 89, 351-362.
- Crawford, W. J. (2005). Verb agreement and disagreement: A corpus investigation of concord variation in existential there + be constructions. *Journal of English Linguistics*, 33, 35-61.
- Hilton, K. (2016). Nonstandard agreement in Standard English: The social perception of agreement variation under existential there. *University of Pennsylvania Working Papers in*

Linguistics, 22/2, Article 8, 61-70.

Hilton, K. (2018). Social meaning in a shifting grammatical landscape: The perception of nonagreement in existential there constructions. *Journal of Sociolinguistics*, 22/2, 233-249.

Krejci, B., and K. Hilton. (2017). There's three variants: Agreement variation in existential there constructions. *Language Variation and Change*, 29, 187-204.

Martinez-Insua, A. E., and I. P. Martinez. (2003). A corpus-based approach to nonconcord in present day English existential there constructions. *English Studies*, 3, 262-283.

野田春美. (2014). 「疑似独話と読み手意識」, 石黒圭・橋本行幸 (編) 『話し言葉と書き言葉の接点』, ひつじ書房, 57-74.

住吉誠. (2016). 『規範からの解放』 (内田聖二・八木克正・安井泉 (編) 〈シリーズ〉英文法を解き明かす: 現代英語の文法と語法④; 談話のことば2), 研究社.

八木克正. (2013). 「フレイジオロジーと実証性」 『関西学院大学社会学部紀要』, 116, 45-61.

引用データ

COCA: Corpus of Contemporary American English (<https://www.english-corpora.org/coca/>)

English-Corpora.org (<https://www.english-corpora.org/>)

iWeb: The 14 Billion Word Web Corpus (<https://www.english-corpora.org/iweb/>)

Pew Research Center (<https://www.pewresearch.org/internet/fact-sheet/internet-broadband/>)

The Movie Corpus (<https://www.english-corpora.org/movies/>)

The TV Corpus (<https://www.english-corpora.org/tv/>)

